



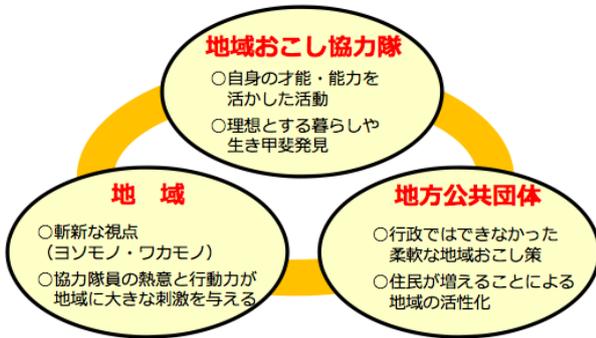
## 「地域おこし協力隊」と「かけはしサポーター」の僕

社会福祉士 小山 潤也

群馬県より鹿児島県に引っ越して、1年半が過ぎようとしている。縁もゆかりもない鹿児島県に引っ越したのは、私が「地域おこし協力隊」になったからだ。地域おこし協力隊は、2009年から地方創生の柱として総務省が推進している取り組みだ。主たる目的は、都市地域から過疎地域等への移住、商品開発やPR活動による地域ブランド力の向上、住民の生活支援など、外からの視点で「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る。平成29年度は997の自治体で、7830人の隊員が全国各地で活動している。賛否両論ある地域おこし協力隊だが、私は鹿児島県の大隅半島にある、「大崎町」という小さな町の地域おこし協力隊になった。この町での任務。それは不登校生の支援。

### 地域おこし協力隊導入の効果

～地域おこし協力隊・地域・地方公共団体の「三方よし」の取組～



## 地域おこし協力隊との出会い

2016年の夏休み。私は高崎健康福祉大学の4年生でした。福祉の就活は遅いと言われつつ、周りの友人たちは内定が決まりはじめていた。自分がやりたい仕事はなんなのか。本当にその仕事がしたいのか。色々と考えていた時、ふと地域おこし協力隊という言葉思い出した。知人が数年前、地域おこし協力隊になっていたことから。何気なく検索していると、「中学生に学校生活がキラキラする毎日を！学校支援員募集」というページを見つけた。しかし、それは締め切りの2日前。直感的にこれだ！と思った私は、ためらわず応募のボタンを押した。話はトントンと進み、2017年4月から、大崎町地域おこし協力隊となった。

## 大崎町が誇るもの



大崎町は、人口14,000人ほどの町です。志布志湾の中に位置し、7キロ続く白砂青松100選「くにの松原」は圧巻です。特産品は鰻やマンゴーで、生産量は鹿児島県一を誇ります。リサイクル率は11年連続日本一。ごみの分別はなんと27分別！最初は戸惑いましたが、ゴミを出さない生活を意識するようになりました。ふるさと納税も盛んで、返礼品には鰻やマンゴーはもちろん、黒豚や焼酎と豪華絢爛です。

(手前味噌のPRになってしまいました…)

おすそわけ文化やことあるごとの飲ん方(=飲み会)は大崎町での暮らしを楽しませてくれます。

「大崎町地域おこし協力隊」で検索！  
Facebook やっています。が、あまり更新できていません…

## 大崎町でのくらしとしごと

大崎町での暮らしは、庭付き一軒家からはじまりました。築 40 年以上のレトロな一軒家にひとり暮らし。自分でペンキを塗ってみたり、休みの日には仲間とバーベキューを試してみたり。それでも、こぶしサイズのクモが出たり、庭の草もあつという間に腰丈にまで伸びたりと、大変なこともあります。でも、それもそれで楽しいです。主体的に楽しむって大切です。

勤務は、毎日、中学校です。中学校では校長先生より「かけはしサポーター」という名前をいただいて活動しています。生徒からは、先生の仕事って何？とよく聞かれますが、生徒からは見えにくい仕事です。具体的な業務で言うと、不登校生への個別支援や家庭訪問、生徒からの相談受付、教員へ不登校や福祉関係の情報提供など、SSW（スクールソーシャルワーカー）のような動きと、学校行事や学校業務の全般の補助といったところででしょうか。

## 置かれた場所で咲けないことも 置かれる場所を選べないことも

私は日々、不登校の生徒と向き合っています。中学生は中学校へ行く。ごく当たり前のようなこの前提に、疑問や困難さ、苦しさを感じる生徒にはどうしたらいいのでしょうか。中学校という場所に置かれたものの、そこでは上手く咲けない子どもたち。中学校という、置かれる場所を変えるだけで、上手く咲ける子どもたちも多くいるはずです。文科省の発表によると、小中学生の不登校は13万人を超えており、中学生の約4%が不登校になっています。（文部科学省 2018 年 2 月公表「児童生徒の問題行動・不登校等調査」より）

かく言う私も、中学生の時、不登校を経験しました。理由はよく分かりません。ただ、自分が自分でない感覚、あの感覚は苦しかった。だからこそ、今「同じ状況に苦しむ生徒の力になりたい。」と心から思っています。

教育機会確保法では、学校以外の学びの場や、多様な教育活動が明記されました。しかし、学校

教育の中での多様な教育活動には限界があります。また、都市部とは違い、地方では適応指導教室やフリースクールなどの施設は非常に少なく、交通手段もありません。すると、不登校の子どもたちは、自宅にいるか、無理をして学校に行くか、という白黒の判断を迫られます。そんな子どもたちを、どこで受け止めてあげたらよいのでしょうか。

## 今の私にできること

幸いなことに、私は中学校でかなり自由な立場をいただいています。登校して来られた生徒を相談室で迎え、居場所としています。勉強以外にも様々な経験・体験をさせたいと思っており、校庭の隅では畑をやっています。洗濯機を使ってみたり、暑中見舞いを作ってみたり、様々な生活体験も意図的にしています。また、使わなくなった幼稚園の園舎をお借りして、不登校生と工作やお菓子作りをしたりもしています。家庭訪問では、部屋と一緒に片づけたり、ボードゲームをしたりしながら、コミュニケーションを図ります。それらが、直接登校に結びつくかはわかりません。ただ、「私はあなたと本気で向き合いたい。一緒に解決していこう。時には楽しんでもいいじゃん」というメッセージを送り続けています。不登校の裏側には、家庭環境や本人の発達特性、思春期特有のゆらぎなど、様々なものがあります。その子どもと、それを取り巻く環境との間に、本人には解決できない摩擦が生じているのです。登校することが、今その子にとって一番大切とも限りません。休養を取ることも必要です。しかし、いずれ進路や自立を考えた時、不利にならないように、支援は図らなければなりません。その難しさを日々痛烈に感じています。不登校という経験・生き方が、本人の糧となるよう、支援を続けたいです。

学校の先生方は本当に一生懸命です。教員の時間外労働が問題になっている今、不登校や特別支援は、専門家や関係機関を交えた会議、コンサルテーション、外部資源の活用が必要だと感じます。